

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2017.9) 平成28年度:28-29.

入退院センターによる早期介入が病棟の看護業務に及ぼす影響

長澤 由香

入退院センターによる早期介入が病棟の看護業務に及ぼす影響

キーワード:入退院センター、ベッドコントロール、ケースマネジメント、アセスメントデータベース(患者基本情報)

旭川医科大学病院 入退院センター

○長澤由香

I. 目的 地域包括ケアシステムに向けて診療報酬が改定され、在院日数短縮化が進み積極的な入退院のマネジメントが必要とされる。A病院では、2008年から入退院センターを設置し、入院前から退院後を見据えて患者のケースマネジメントを行っている。本研究はA病院の入退院センターの看護師が作成した患者基本情報(アセスメントデータベース)が、看護業務の効率化、看護実践の質の向上につながっているかを明らかにすることを目的とした。

II. 方法 データ収集期間:2015年5月1日~31日。
研究対象:2014年11月以降に本センターを利用した患者が入院する先の病棟看護師約300名。(2015年4月以降に入職した看護師を除く)

データ収集・分析:研究者が作成した調査用紙を用い無記名式で回答を求めた。量的データは単純集計し、自由記載欄は内容の類似性に基づいて分析した。

III. 倫理的配慮 研究目的、方法等を文書で説明し、調査用紙の回答をもって同意とした。データを分析する段階において個人を特定できる情報は削除した。また研究者の所属する機関の倫理委員会の承認を得てから調査を行った。

IV. 結果 回収は、300件中215件であった(回収率72%)。入院予約時に作成した患者基本情報は、全ての病棟看護師が利用し、97%の看護師が入院時の面談前に確認していた。また確認に要する時間は「10分以下」が93%であり、入院時の患者との面談時間は85%が減少したと回答した。最も活用した場面は「入院時」の93%であるが、職位別では全ての看護師長が「ベッドコントロール」に活用していた。事前に患者基本情報を得ることで有用なことは「必要な情報がとれる」が93%、「全体像の把握」、「認知症患者の危険回避」および「転倒予防」が90%、「アレルギー対策」が88%、「部屋の環境準備」が85%であった。看護業務に活用できたことは「患者と接する心構えができる」が93%、「記録時間が減少しケア時間が増加した」が86%、「コミュニケーションがとりやすい」が85%であった。本センターと病棟の連携については「前処置が説明されており、オリエンテーションがスムーズである」が77%、「必要物品の説明がされておりオリエンテーションがスムーズである」が71%であった。他部門との連携では「地域医療連

携室へ事前情報が有り退院支援がスムーズにできた」が50%であった。

V. 考察 PFM(patient flow management)導入の利点について川口は「入院時に発生する患者基本情報の聴取、入院案内、患者の状態に応じた病棟の準備など、病棟看護師の業務の負担軽減につながる。そして事前情報収集することによって、安全で適切でスムーズな検査・治療が可能になるなど、時間の節約と質の高い医療の提供につながる。」¹⁾と述べている。病棟管理業務を行うA病院の看護師長は、本センターが作成した患者基本情報を患者サービス、安全管理、業務管理に活用し効果的なベッドコントロールに利用していた。急性期病院であるA病院は、入院直後に侵襲的な検査や手術を予定していることが多い。病棟看護師は、入院前に前処置・必要物品の説明が行われているため前処置・術前オリエンテーションを効率的に行うことができていた。一方、認知や身体機能、あるいはアレルギー等の情報は、病棟看護師のリスクアセスメントにつながり、転倒予防など患者の危険回避のケアに役立てられていた。また情報収集時間の短縮により患者ケア時間が増加し、患者基本情報から気付きが点となり、より深い情報を患者から得て患者ケアの質を高められると考えられた。他方、入院期間の短縮とともに患者と関わる時間や信頼関係を築くための時間が減少している。病棟看護師は、事前に患者の情報を得ることによって、患者と関わる上での心構えをしており、患者基本情報を円滑なコミュニケーションのために活用していた。

VI. 結論 1. 看護師長は、患者基本情報を効果的なベッドコントロールに、病棟看護師は、効果的なオリエンテーションやリスクアセスメントに活用していた。

2. 患者の情報収集時間の短縮化は、病棟看護師の患者ケア時間の確保に繋がっていた。

3. 病棟看護師は、事前に患者の情報を得ることによって、患者と関わる上での心構えをしており、患者基本情報を円滑なコミュニケーションのために活用していた。

VII. 引用文献

1)川口幸子:東海大学医学部附属病院におけるPFM15年の取り組み、看護展望、Vol.39、no.11 P24-29 2014

入退院センターによる早期介入が病棟の看護業務に及ぼす影響

旭川医科大学病院 入退院センター

○長澤由香

目的	【背景】 地域包括ケアシステムに向けて診療報酬が改定され、在院日数短縮化が進み積極的な入退院のマネジメントが必要とされている。A病院は、2008年に入退院センターを設置し、入院前から退院後を見据えて患者のケースマネジメントを行っている。 【本研究の目的】 A病院の入退院センターの看護師が作成した患者基本情報（アセスメントデータベース）が、看護業務の効率化、看護実践の質の向上につながっているかを明らかにする。
	方法
	倫理的配慮 研究目的、方法等を文書で説明し、調査用紙の回答をもって同意とした。データを分析する段階において個人を特定できる情報は削除した。 研究者の所属する機関の倫理委員会の承認を得てから調査を行った。
	結果

病棟看護師の患者基本情報利用状況	アンケート回収率72%（回収300件中215件） ①利用率 100% ②入院時面談前の確認 97% （未確認1% 無回答2%） ③確認に要する時間は10分以下 93% （15分以下5% 20分以下1% 40分以下1%） ④情報がある場合の入院時面談時間の減少 85% （変化なし7% 増加3% 無回答5%）	⑦事前に得ることで有用なこと
	⑤活用場面 1. 入院時の担当 93% 2. 部屋担当 44% 3. リーダー業務 33% 4. ベッドコントロール 19% 5. スタッフの教育 5% 6. その他 4% 7. スタッフの管理 2%	⑧看護業務に活用できたこと
	⑥活用場面（職位別） ■ スタッフ (188人) ■ 副師長 (19人) ■ 師長 (7人) 1. 入院時の担当 95% (Staff), 100% (Nurse) 2. 部屋担当 46% (Staff), 42% (Nurse) 3. リーダー業務 31% (Staff), 63% (Nurse) 4. ベッドコントロール 14% (Staff), 37% (Nurse), 100% (Nurse) 5. スタッフの教育 3% (Staff), 28% (Nurse) 6. その他 14% (Staff), 5% (Nurse), 28% (Nurse) 7. スタッフの管理 0% (Staff), 14% (Nurse), 16% (Nurse)	入院前の看護介入で病棟に連携できたこと
	他部門と連携したことで病棟の介入がスムーズにできたこと 1. 地域医療連携室の看護師：退院支援 2. 皮膚排泄ケア認定看護師：ストーマの介入 3. 緩和ケア認定看護師：緩和ケアの介入 4. 腫瘍センター：不安への介入	考察 急性期病院であるA病院の背景 → 入院後に侵襲的な検査や手術を予定していることが多い 入院期間の短縮とともに患者と関わる時間や信頼関係を築くための時間が減少している 患者基本情報 → 病棟看護師長 → 患者サービス、安全管理、業務管理に活用し、効果的なベッドコントロールに利用していた。 病棟看護師 → 認知や身体機能、アレルギー等の情報は、病棟看護師のリスクアセスメントにつながり転倒予防など患者の危険回避のケアに役立てられていた。 気がかりな点が明確となりより深い情報を患者から得て患者ケアの質を高めることができていた。 情報収集時間が短縮され、患者ケア時間を増やすことができていた。 患者と関わる上で心構えをしており円滑なコミュニケーションのために活用していた。 前処置・必要物品の説明の実施 → 前処置・術前オリエンテーションを効果的に行うことができる

結論	1. 看護師長は、患者基本情報を効果的なベッドコントロールに、病棟看護師は、効果的なオリエンテーションやリスクアセスメントに活用していた。 2. 患者の情報収集時間の短縮化は、病棟看護師の患者ケア時間の確保に繋がっていた。 3. 病棟看護師は、事前に患者の情報を得ることによって、患者と関わる上で心構えをしており、患者基本情報を円滑なコミュニケーションのために活用していた。	引用文献 1) 川口幸子：東海大学医学部付属病院におけるPFM15年の取り組み、看護展望、Vol.39 no.11 P24-29 2014
----	---	---